

住

名古屋畳商工業協同組合

健康、くつろぎ、安心できる 畳の部屋

伊勢湾台風を機に進んだ機械化

「畳の目を読む」といっても、最近ではわからない人が増えています。それだけ畳で生活する時間が少なくなっているということでしょう。それでも日本間といわれる部屋になくはならないのが畳です。

日本で畳が使われるようになったのは奈良時代の頃からで、マコモを編んだムシロのようなものを何枚か重ねて畳床として、その上に畳表を敷いてベッドのように使っていたようです。その後、畳床に稲藁が使われるようになっていきました。

畳屋さんの仕事は畳床に藁草農家が仕上げた畳表と縁を縫い付けて販売することです。名古屋畳商工業協同組合の設立は昭和23年、個人経営の多い畳屋さんのため、共同仕入れをしたり健康保険、労働保険などの手続などをおこなっています。裁断、縫い方などは手作業でしたが、昭和34年に名古屋を襲った伊勢湾台風からの復興時に跳ね上がった畳の需要に応えるため、機械が導入されました。大きな寺院などでは、特別な紋のついた畳縁を使います。隣り合った畳縁をきれいに合わせるには長年の熟練が必要です。



消費者に品質表示をアピール

抗菌性や空気の浄化作用がある畳は、住まいの中で身体を密着させて寝転べるスペースです。それだけ



に、消費者の安心、安全を納得してもらえる品質を確保しなければなりません。一方で消費者の品質管理に対する関心は年々厳しくなっています。畳といえども例外ではありません。JIS製品はJIS認証工場でなければつくりえないため、個人経営の多い畳屋さんがJISの認定を受けるのはほとんど不可能です。

組合では昭和50年頃から国が認定する一級技能士検定の資格取得に力を入れてきましたが、さらに技術と品質の向上を目指し、消費者にアピールのできる品質表示証書の貼付を全日本畳事業協同組合と一緒に取り組んでいます。

また、マンションなどでは畳の需要が減っているため、住宅以外の、例えば柔道場などでの畳需要の掘り起こしなどにも力を入れています。国産の藁草を使用した畳の部屋は集中力を高める効果があるとの実験結果もあります。畳のある生活が、もっと見直されて欲しいものです。

DATA ■名古屋畳商工業協同組合
所在地：北区清水五丁目6-9 国保組合会館内
・昭和23年：名古屋畳商工業協同組合設立